談話におけるトピックの転換と一貫性について

——手話の談話分析を通して——[1)]

堀　越　喜　晴

はじめに

談話（discourse）には，通常いくつかの異なるトピックが存在する。同時に，それらのトピックの間には，ある一貫性が保たれていなければならない。そのため，個々の談話においてトピックが転換される時，すなわち，topic changeに際して，そこには必ず前のトピックをその次のトピックにつなげるための（あるいは前のトピックを打ち切り，そこから全く新しいトピックを始めることを示すための）何らかの手がかりがあるはずである。

本稿では，手話[2)]の談話分析を通して，その手がかりがどのような形で談話の表面に現れるか，あるいは，暗示されるかについて考察する。

今日の談話分析およびテクスト言語学では，コミュニケーション場面における言語の運用，あるいは，コンテクストといった要因が，極めて重要なものとして再評価されている。その中にあって，文脈依存性が極めて高く，また，音声言語ではコミュニケーションの際の副次的な要因とされている顔の表情や身ぶり・動作などを，極めてクルーシャルな要因として取り込んでいる手話の分析や研究の結果は，この問題に対し，有力な示唆を与えてくれるのではなかろうか。

なお，本稿で用いる「トピック」あるいは「話題」は，様々なレベルで，意味的なまとまりを持っていると考えられる大小の，ある単位において一貫して表現されている「……について語っていること」の「……」にあたる要素をさす用語として用いる。

1.　手話の談話におけるトピックの導入および転換に際してみられる特性

手話（sign language）とは，手・指・その他からだ全体，あるいは，顔の表情などを利用して発信し，視覚を通じて受信することによって行われる，コミュニケーションの手段の総称である。

手話が今日の言語学の枠組で盛んに論じられるようになったのは，1960年以降のことである。そのきっかけを作ったのは，アメリカの William C. Stokoe（Stokoe 1960, 1972等参照）であった。それ以後，手話の sentance を規定し，文法規則を記述するための，様々な試みがなされてきた。しかし，手話をその文脈から切り離して，いわゆる今日の文・文法の枠組で記述することは，不適切であるということが，多くの観察や実験を通して浮かび上がって来た（Schlesinger 1971, Terrvoort 1978）。そこで，手話は少くともコミュニケーションの用に供し得るという事実に着目し，コミュニケーション場面における

文よりも大きい単位，すなわち，談話（discourse）のレベルでまず手話を捉える必要があるとする主張が，最近しばしばなされている（Friedman 1976, Terrvoort 1978, 田上 1981, 堀越 1984・1985）。

本稿ではこの考え方に従って，以下，手話の談話においてどのようにトピックが導入され，また，転換されるかについてみていくことにする。

1.1 トピック導入の際の場面の設定

手話の談話では，しばしば新しいトピックの導入に先立って，そのお膳立てとなるような一連の手話が発話される。次の例は，本名（1978）に示されている，音声日本語のテクストを日本の伝統的な手話（以下，“JSL” と略す）にそのまま訳させた時の結果である。

〔例1〕 A　深い秋の静かな晩だった。
　　ソノ・トキ・シズカ・アキ・ヨル[3]。
　B　沼の上を雁が啼いて通る。
　　ヌマ・ウエ・トリ・トブ・ユク。
　C　細君は食台の上の洋燈を端の方に引き寄せて，其下で針仕事をしている。
　　フウフ・イル・オクサン・ヘヤ・スミ・デンキ・ヒッパル・サイホウ。
　D　良人は其傍に長々と仰向けに寝ころんで……いた。
　　ダンナサン・ヨコ・ボンヤリ・ネコロブ。
　　（志賀直哉「好人物の夫婦」より。本名 1978, pp. 72—73）

この〔例1〕でAの最初の手話「ソノ・トキ」は，音声日本語のテクストには現れていないが，JSL ではしばしば，このように「秋」というような具体的な「時」の記述に先立って，「その時は」といった手がかりとなる要素を置く。同様に C. D において音声日本語では「細君は」「良人は」と直接語り出されているのに対し，JSL ではまず「フウフ・イル」というきっかけを与えておいて次に，そのうちの「奥さんは……」「旦那さんは……」というように順に語られている。このような現象を本名は JSL における「場面の設定」とよんだ。

また，

〔例2〕 A　イマ・カラ・イマ・カラ・センソウ・ハナシ・スル
　　今から，戦争の話をします.
　B　イマ（同時に口話[4] で「昭和」）・ジュウニ・ネン・ゴロ……センソウ・ハジマル・ツヅク。
　　昭和 12 年頃……戦争が始まってずっと続いた。
　　（上野益雄研究室所蔵ビデオテープより[5]。）

この〔例2〕では，Aでまずこれから展開される談話のトピックが戦争に関する事であることがはっきり示され，Bでは，最初の手話「イマ」とそれに伴う口話での「昭和」および次に続く手話「ジュウニ・ネン・ゴロ」によって，語られるのが「現在」のことではなく，「昭和12年当時」のことであるという事が示されているが，これも〔例1〕と同様の「場面の設定」とみることが出来る。

このように，手話の談話にあっては，トピックの導入に際して，まず，そのために場面

を設定し，それにより発話の際に利用する空間[6]を限定しておき，次に，これに基づいて，トピックの中核をなす具体的な要素の発話へと進んでいくことが多い。

1.2 トピックの転換の際の橋渡し的要素

先の〔例1〕において，Cの「フウフ・イル」という二つの手話がこれに続く談話のための場面の設定となっていた。これは同時にそれまでの「静かな秋の情景」から，その後の「夫婦それぞれの行動」への急激なトピックの転換を緩和するはたらきもしているとみることが出来る。

また，次の〔例3〕は，配給される食糧や石けんがだんだん少なくなった話や，防空壕の中での着のみ着のままの生活の話に続く談話である。

〔例3〕 クウシュウ・クウシュウ・クウシュウ・ワタシ・イエ・スム(イル，アル)・カンダ・スム・トキ・ユキ・フル・トキ・ニガツ・スエ・ゴロ・ソノ・サムイ・トキ・フル・トキ・ヨル・カクセイキ・キキトル・ワタシ・キコエナイ・キコエナイ・キコエナイ・オコサレル・メヲサマス。

空襲の時，わたしの住んでいた家は，神田にあったのですが，そこに住んでいた時，それは雪の降る二月の終わり頃の，寒い時でした。その雪の降る夜，警報が鳴ったのに，わたしは耳が聞こえないので，起こされて目を覚ましました。

（〔例2〕に同じ。）

ここで最初に「クウシュウ」（先行する談話に既出）を三回発話することにより，これ以後の談話のトピックの中核がやゝ強調されて示される。さらにこれに続く一連の手話によって，その場所・時・その時の様子が場面として入念に設定される。その上でようやく，話者自身を主人公として，話題が展開されていく。

「場面の設定」は，このように手話の談話においてトピックが転換される時にもみられる。このような場合，「場面の設定」はそれ以後のトピックへのきっかけを示し，急激なトピックの転換を緩和し，また，それまでのトピックと次のトピックとの関連を示唆するといった役割を果たしている。

次の〔例4〕は，話者が聾学校の寄宿舎に入った当時のことを回想して語っているものであるが，ここではさらに，小さな単位でのトピック転換に際しての場面の設定が観察される。

〔例4〕 A シュクシャ（右方に）・クギリ・ヨン・シュクシャ（左方に）・クギリ・オナジ（右から左へ動かしながら繰り返す）・サン・シュクシャ（右方）・シュクシャ（中央）・シュクシャ（左方）・ゼンブ・オトコ（左手で）・オンナ（右手で）・シュクシャ・オナジ。

宿舎は四部屋に区切られており，どの棟も同じ構造になっていた。男子寮が三棟あり，女子寮も同じく三棟あった。

B コレラ・ナカ・ロウアシャ・ナカ・ホッカイドウ・クル・アオモリ・イワテ・フクシマ・ミヤギ・アキタ・ニイガタ・フクイ（だんだん左に）・ソコ（右人さし指で左方を示す）・シズオカ・カナガワ・チバ・アツマッテクル。

これらの聾唖者は，北海道……などから集まって来ていた。

C　カッコウ・キシュクシャ・ガッコウ・チカイ・ココ・ワタシ・ハイル。
わたしは，学校の近くにある寄宿舎に入った。
（山澤 1982, pp. 14—15）

この〔例4〕で，Aでのトピック（すなわち，寄宿舎の構造）が，Bでは，聾唖生の出身地に関することへと転換されている。この転換において，最初に発話される手話「コレラ」によって，Aで提示された宿舎の各棟がまとめられる。この手話は，次の「ナカ」と相俟って，Bのトピックの中核である「ロウアシャ」のための場面を設定している。次に生徒の出身地を示す様々な地名があげられているが，最初の「ホッカイドウ」の直後に「クル」を発話することにより，それらの地名と「ロウアシャ」との関係をいち早く明示している。さらに，この事は「ソコ」によって確認され，最後にもう一度「アツマッテクル」を発話することによって，一段と確かなものとされている。Cにおいて，トピックは再び転換されて，「わたし」が学校の寄宿舎に入ったことへと移るが，ここでもまず，学校と「わたし」の入った寄宿舎の棟との位置関係が設定され，次にその棟は（他の棟に比べて）学校に近いことが示され，「ココ」を介して，トピックの中核である「ワタシ」へとつなげられているのである。

このように，手話の談話では，トピックが転換される際に，前後の談話の流れの間に立ってその急激な変化を緩和し，また，前出の要素を混じえ，あるいは，前提としながら，後続の談話の場面を設定するための何らかの要素が置かれる傾向がある。筆者は以前にこのような現象に触れ，これを bri ɕi ng とよんだ（Hori koshi 1983）。この bri ɕi ŋ すなわち「橋渡し的要素」は，手話の談話の多様なトピックに連関を与え，談話としての一貫性を保持するための重要な要因となっているものと考えられる。

2.　音声日本語における主題の省略

前節では，手話の談話にはトピックの転換にあたって，前後の連関を保つための手がかりとして，「橋渡し的要素」を置く傾向があるということを述べた。それでは，音声言語の談話ではこの手がかりはどのような形をとるのであろうか。本節では，音声日本語のいわゆる「主題の省略」に対する，寺倉（1986）の説明を検討しながら，この問題を考えていくことにする。

2.1　トピックの意味断絶の有無と主題の省略

久野（1973）によれば，主題となり得るのは，談話中，既に登場した要素，あるいは総称的なものをさす名詞句であり，通常「は」でマークされる（久野 1973, pp. 28—30）。この主題は，談話にあってしばしば省略される。久野（1978）は，この現象を話者の「視点」という立場から説明している。すなわち，主題をながめる話者の視点とその主題が前提としている前出の要素に対する話者の視点との間に一貫性がある場合に，後続文の主題が省略可能になるというのである。

これに対して，寺倉は次のような例をあげて反論している。

〔例5[7]〕夫「今晩山田君が来るよ。晩御飯によんだんだ。いいだろう？」
妻「ええ，それはかまわないけど。山田さん（または，あの人）まだ結婚しないの

？」(寺倉 1986, p. 98)

〔例6〕 突然覆面をした数人の男が太郎になぐりかかってきた。太郎は（または，彼は）腕に自信がある。それで……。(同前 p. 103)

〔例7〕〔僕は〕今日銀座で花子と会った。花子は（または，彼女は）ピアノが弾けるらしい。ちっとも知らなかった。(同前 p. 103)

寺倉によれば，これらの例では，いずれも第二文の主題をながめる話者の視点は，その前提となっている第一文の要素に対するそれと同じである。にもかかわらず，それぞれの第二文の主題が省略されると，談話の自然な流れがそこなわれてしまうと寺倉は主張する。

寺倉は代案として，二文間の意味的断絶の有無を，主題の省略の条件としてあげている。すなわち，寺倉によれば，〔例5〕の第一文で「夫」は「山田」を食事に招待したと言っているのに対し，第二文で「妻」はそれとは関係のない「山田」の結婚のことを話題にしている。〔例6〕および〔例7〕も同様で，第一文と第二文の話題の間には直接的な関係はない。寺倉は，このような場合に第二文の主題が省略されると，「聞き手は何の事か分からなくなる怖れがある」(p. 101) ので，主題は反復され，第一文と第二文の話題が「継続」している時に限り，第二文の主題が省略可能になると説明している。

2.2 寺倉（1986）の問題点

上に見た寺倉の説明でまず問題となるのは，何をもって「意味的継続」あるいは「非継続」とみるかということである。たとえば，〔例5〕は，第二文の主題が省略されても，会話として十分成立し得る。その場合，第二文は寺倉のいう「継続文」であるということになる。

〔例8〕 夫「今晩山田君が来るよ。晩御飯によんだんだ。いいだろう？」

妻「ええ，それはかまわないけど。まだ結婚しないの？」

夫「結婚するって，だれが？」

妻「山田さんがよ。」

ここでは，「妻」は第二文を「継続文」として発話しているのに対し，「夫」はその「継続」性を認めておらず，主題の反復を要求している。このように寺倉のいう「意味的継続・非継続」は多分に話者の心的態度あるいは話者と聴者との共通理解といった要因によって決定されるのである。

次に，寺倉のいう「意味的非継続」を埋めるものは，果たして主題だけであろうかということが問題となる。

〔例9〕 突然覆面つけた男たちがさ，太郎になぐりかかってきたんだよな。だけどもさ，腕に自信があるものだから……。

〔例10〕 〔ぼくは〕今日，銀座で花子と会った。見ると腕に数冊のピアノのピースを抱えていた。どうやらピアノが弾けるらしい。ちっとも知らなかった。

この〔例9〕では，「んだよな。だけどもさ」といった付属語および接続詞が，また〔例10〕では，一つの文全体と「どうやら」という副詞が，それぞれ前後のトピックをよりスムーズにつなげる働きをしている。このように，後続文の主題を反復することは，談話の

一貫性を保つための一つの手段ではあるかもしれないが，それを必要条件と見なすことはできないのである。

3. 音声言語の談話における「橋渡し的要素」

1節では，手話の談話にはトピックの転換に際して，前出の要素を前提としながら後続のトピックのために場面を設定する「橋渡し的要素」が存在することを示した。手話の談話では，この場面の設定による，発話の際の空間の限定（1.1 参照）は，送り手と受け手との間で一つの場面を共有するための手段であると見ることができる。

ところで，音声言語の談話にあっても，話者と聴者との間で，ある「場面」が共有されていることは談話としての一貫性を保ち，コミュニケーションを成り立たせる上で不可欠な条件である（2.2 参照)。従って，手話の談話に見られる「橋渡し的要素」は，何らかの形で音声言語の談話にも存在するのではなかろうか。

van Dijk (1977) には，topic change に関する次のような記述が見られる。

> Admissible changes of topic of conversation are problem for an empirical investigation. At the formal level it may be assumed that such a change is possible only if there is at least one concept (individual—, property—or even propossition— concept) belonging to both ranges determined by two topics of conversation,……(p. 51)

van Dijk は，その例として次のような文を掲げている。

〔例 11〕 We were at the beach, but the *water* in the swimming pool is much cleaner. (p. 51，下線部筆者)

van Dijk は，この下線を付した water が，この場合両方のトピックにかかわりを持つ要素であるとしている。この要素は，先に述べた「橋渡し的要素」に相当するものであると考えることができる。

前節でみた音声日本語の談話における主題も，この「橋渡し的要素」の一つとなり得るものである。しかし，〔例 9〕〔例 10〕に示したように，この働きは，他の要素によっても果たされ得るのである。

また，〔例 8〕の場合のように話者と聴者との間で「橋渡し的要素」に関して理解のズレがある時，そこには当然，発話意図の理解の困難もしくは誤解が生じてくる。

〔例 12〕 A「じゃ，あした，どうせデパートに行くついでがあるから，それ買ってそこからCさんに送っておけばいいのね。」
B「そうして頂けると助かります。」
A「で，住所が分からないから，うちの住所で送っとくからね。」
B「え？でも，そうしたらCさんに届かないんじゃ……。」
A「だから，あなたのね，住所が分からないから，だからうちの住所，書いて，送っといたらいいでしょう？」

この例は，ある電話の会話からとったものである。ここでAは「住所」という簡単な「橋渡し的要素」で前半部の小単位でのトピック，すなわち「Cに何かを送ること」から

後半部のトピック，すなわち「差出し人の住所に関すること」へと話をすすめている。しかし，Bにとってこの「橋渡し」は十分ではなく，これを受取人であるCの「住所」のことと誤解したものと思われる。Bにとっては，さらに「あなたの」という限定が必要だったのである。

このように手話の談話に見られる「橋渡し的要素」は音声言語の談話にも見られ，同様の機能を果たしているとする主張には十分な根拠があると考えられる。前にも述べたように，手話は表情や手の動き，また，からだの回りの空間の操作など音声言語では副次的な要因を，いわば morphological なレベルでのきわめて重要な要因として使用しており，コンテクストへの依存性もきわめて高い。また，音声言語では一般に文の内部の，あるいは文を越えたある単位の内部の個々の要素の間には厳しい制約を持つ構造が存在し，これにより，ある要素は遠い位置にある他の要素を指示することが可能になっている。これに対して，手話には意味的な遠近関係が要素間の相対的な位置関係を決定する傾向が，音声言語に比べて強く (Namir and Schlesinger 1978)，従って，テクスト指示の範囲が極端に狭くなっている。「橋渡し的要素」が手話の談話でこのようにきわだった形をとって現れるのは，そういった理由によるものと推察される。

本稿では、談話においてトピックが転換される際にその転換の合図をし，また前後のトピックの間の連関を示唆する手がかりとなっている要素を求めて，論を進めてきた。その結果，手話の談話分析から得られた証拠に基づいて，その手がかりは何らかの意味で転換以前のトピックと関連を持ち，転換以後のトピックのために場面を設定する「橋渡し的要素」であるという結論に至った。上で見たように，この「橋渡し的要素」は様々な形をとって現れるが，これはまた，談話の媒体や送り手と受け手との関係（それぞれの人数，特定か不特定か，両者間の親密度など）の違いによっても，それぞれに特徴的な現れ方をするであろう。

これまでのところでは，本稿で用いた「場面の設定」「橋渡し的要素」といった用語は，かなり，あいまいであり，精密化が必要である。しかし，今後，談話の様々なレベルでの，この要素のあり方を観察・研究することにより，上で見た「主題の省略」をはじめ，様々な問題に対する新しいアプローチの方法が得られ，また談話の種々の側面にわたる興味深い現象が浮彫りにされ得るものと考える。

ま と め

本稿では，一連の談話においてトピックが転換される際に，どのようにしてその間の連関が保たれているかということについて述べた。そして，日本の伝統的な手話の，談話分析に基づいて，以下のことを指摘した。

① 手話の談話には，トピックの転換に際して，前出の要素は何らかの形で示唆しながら，後続のトピックのための場面設定をし，それにより前後のトピックの間に連関を与えるはたらきをする「橋渡し的要素」が見られる。

② 音声言語の談話にも，やはり同様の要素が存在し，同様の機能を果たしている。

③ 音声日本語における，いわゆる「主題」も，談話においてこの機能を果たし得る一

要素であるが，この機能は種々の付属語や接続詞あるいは一つの文全体，その他の要素によっても果たされ得るものである。

注

1) 本稿は，筆者が点字で下書きをしたものを，本文は遠山和美氏に，注および参考文献は香山洋人氏に口述筆記して頂き，全体の清書を小笠原益子氏および馬場俊臣氏にお願いして，成ったものである。また，全体の内容および構成に関しては，筑波大学文芸言語学系の芳賀純教授より入念な御指導を頂いた。また，稿を成すに当たり，多くの方々に貴重な御助言を頂いた。ここに芳賀純先生はじめ諸氏に深く感謝申し上げます。

3) これに対し，一般に用いられている言語すなわち音声聴覚チャンネルおよび文字を使用した言語体系のことを本稿では音声言語とよぶ。

3) 以下，手話の記述はこのように，各々に最も近い音声日本語を片仮名で示す。

4) これは，手話に対して音声言語を発音する際の口形によって，それぞれの単語を読みとり，また伝えることによって行うコミュニケーションの方法である。

5) 本ビデオテープの閲覧を快諾して下さった筑波大学心身障害学系上野益雄助教授ならびに，ビデオ内容の解釈および音声日本語訳に御協力下さった松塚直子・蕗塚栄也両氏に対し深く感謝申し上げます。

6) 手話では，発話の際に話者のからだのまわりの空間がきわめて重要な要因として利用される。(Friedman 1976，山澤 1982 等参照)

7) 以下，寺倉の表記に従い，省略が可能な主題を〔 〕に入れて示す。また，傍点を付した名詞句が考慮の対象とされている。

〔参考文献〕

van Dijk, T.A. (1977) Text and Context, Longman, London.

Friedman, L.A. (1976) "The manifestation of subject, object, and topic in American Sign Language", in C.N. Li (ed.), Subject and Topic, Academic Press, New York, pp. 127-148。

本名信行 (1978) "伝統的手話の語順について" F.C. パン・田上隆司編『手話の諸相』文化評論出版 pp. 65-75

Horikoshi, Yoshiharu (1983) A Study of Sign Language Discourse (筑波大学博士課程文芸・言語研究科修士論文) 未刊。

堀越喜晴 (1984) "手話の言語学的研究——現状，課題および一提案——"『言語学論叢 3 号』(筑波大学一般・応用言語学研究室) pp. 32-45

堀越喜晴 (1985) "手話の談話分析の試み——Vicki Lee Edge, Leora Hermann 著 "Verbs and the determination of subjects in American Sign Language" をめぐって——"『手話研究第一集』(筑波大学心身障害学系 上野益雄研究室) pp. 25-34.

久野 暲 (1973)『日本文法研究』大修館書店

久野 暲 (1978)『談話の文法』大修館書店

Namir, L. and I.M. Schlesinger (1978) "The grammar of sign language", in I.M. Schlesinger and L. Namir (eds.) Sign Language of the Deaf, Academic Press, New York, pp. 97-140.

Schlesinger, I.M. (1971) "The grammar of sign language and the problem of language universals", in J. Morton (ed.), Biological and Social Factors in Psycholinguistics, Logos Press, Cambridge, England, pp. 98-121.

Stokoe, W.C. Jr. (1960) Sign Language Structure: An Outline of the Visual Communication Systems of the American Deat, Gallaudet College Press, Washington D.C.

Stokoe, W.C. Jr. (1972) Semiotics and Human Sign Languages, Mouton, Paris.

田上隆司 (1981) "手話とはどんなことばか" 中野善達編『手話の考察』福村出版 pp. 10-45.

寺倉弘子 (1986) "談話における主題の省略について"『月刊言語 15 巻 2 号』pp. 98-105.

Terrvoort, B.T. (1978) "Bilingual Interference", in I.M. Schlesinger and L. Namir (eds.) Sign Language of the Deaf, Academic Press, New York, pp. 169-239.

山澤慎一 (1982)『伝統的手話の特徴の分析——位置・方向を中心に——』(筑波大学修士課程教育研究科修士論文) 未刊。

(本学大学院博士課程応用言語学)